

☆ ☆ ☆

「灯里、一体この手袋どうしたの？」

そう灯里に詰め寄ったのは、姫屋の制服を纏った藍華・S・グランチェスタだった。

藍華はさらさらしたショートカットの黒髪をなびかせ、テーブルを挟んで向かいに座っていた灯里の方に身を乗り出した。

「私の部屋に行ったらアリア社長がいてね。その手袋を渡されたんだ」

「藍華先輩。その質問は何度目ですか？」

今度はオレンジプラネットの、アリス・キャロルだった。アリスは、カップに入った紅茶をゆっくりと飲みながら灯里と藍華のやりとりを見守っている。

「だって、後輩ちゃん。考えてもみなさいよ。アリア社長が手袋を持ってくるなんて、おかしい話でしょ」

「でっかい普通の事だと思いますが？」

ここはARIAカンパニーの一階オフィス。昼下がり、カウンターの後ろにあるテーブルにて三人と一匹は目下食後のティータイムを堪能している最中だった。

藍華とアリスは、それぞれ、姫屋、オレンジプラネットという、水先案内店の見習いウ

ンディーネだ。

二人はふとしたことから灯里と仲良くなってからというものの、会社の垣根を越えて一緒にゴンドラ漕ぎの練習などをやっている。今日も、午後からは三人で合同練習の約束をしており、お昼を食べたらARICAカンパニーに集合と言うことになっていた。

白地に赤の模様が入った水先案内人の制服に身を包んでいる藍華は、このネオ・ヴェネツィアで一番の老舗、姫屋の跡取り娘だ。さらさらしたショートカットを、今日は青い目をした猫のヘアピンで留めている。藍華の右手には赤い手袋。灯里と同じ片手袋の水先案内人である。

アリスは、白地にオレンジで描かれた水先案内人の制服を纏っていた。オレンジプラネットという水先案内業界では最大手の水先案内店である。アリスの両手にはオレンジ色の手袋が、両手にあつた。両手袋の水先案内人であるが、それもそのはず。アリスはミドルスクールの3年生である。学校でゴンドラ部に所属していたアリスは、その活動実績が認められオレンジプラネットにスカウトされ入社した。両手袋とはいえオール拵きは片手袋の灯里達よりも滑らかで、月刊ウンディーネという雑誌に取り上げられたりするほどの有名な人でもある。

「アリア社長へ。この手袋どこから持ってきたのよ」

「ぴんぐりんぽん」

藍華の興味は、手袋からアリア社長に向けられたが、アリア社長は覚えがないといった様子で、困っていた。

「その手袋、灯里のじゃないんでしょ？」

「うん。私が両手袋から片手袋に昇格したときの手袋は、大切にとってあるんだよ。だから私のじゃないと思う」

「灯里先輩、それはでっかいおかしいです」

「ほへ？」

「灯里先輩が昇格したときの手袋は左手用の手袋のはずです。でもその手袋は右手用の手袋ですから、もしその手袋が灯里先輩の物なら予備の手袋という事になります」

「ああそっかあ」

「灯里、予備の手袋最近洗濯した？」

「うーん……してないかも」

「じゃあ、だれの？」

「もしかして、アリスさんが片手袋の時ののでしょうか？」

アリスは手袋を見つめながら灯里に聞いた。

「アリスさんのなのかなあ……でもアリスさんの手袋だったらどうして私の部屋に落ちてるんだらう……」

「分らないわねえ。灯里、ちょっとその手袋つけてみなさいよ」

「う、うん」

手袋は右手用の手袋だったので灯里は今つけている自分の手袋を取ると、アリア社長が持ってきた手袋に指を通す。

「あ、あれ」

「はいらないわね」

「灯里先輩の手がでっかいからです」

「それじゃあ、灯里、今度はあたしに貸して」

「うん。これって、なんだかまるで童話みたいだね。私たちは、ガラスの靴の持ち主を探す王子様みたいだよ」

「それじゃあ、お姫様はあたしよ」

灯里はアリア社長が持ってきた手袋を外すと、斜はみ向かいに座っていた藍華に手渡した。

「藍華ちゃんどう？」

手渡された藍華も自分の右手から手袋をとってつけてみるが、きつそうで入らなかつた。

「だめね。じゃあ、つぎ後輩ちゃん」

「私もやるんですか？」

「アリスちゃんもつけてみなよ。もしかしたら、アリスちゃんがお姫様なのかもしれないよ」

「灯里先輩がそう言うなら……」

「後輩ちゃんってば素直じゃないんだから」

そういつてアリスも右手から手袋を取って、アリスの目の前にあった青い手袋に指を通した。

「おや？」

手袋はアリスの手にぴったりとはまっていた。

「後輩ちゃん。もしかしてあなたがプリンセスだったのね？」

「わーい。アリスちゃんか、お姫様なんだ」

「ふいにゆー！」

「まっってください。先輩方」

アリスはそう言ってから、手を下に向けた。

すると、アリスの手にぴったりとはまっていたかのように見えた手袋は、アリスの指を伝ってするりと抜け落ちテーブルの上へと落ちた。

「でっかい、ゆるゆるです」

「まあやっぱりね」